

- ・ 2021年11月21日（日）
- ・ 「スローライフ・フォーラム in 十津川」
- ・ パネルディスカッション「「むら」に生きる」
- ・ コーディネーター：

増田寛也（東京大学大学院客員教授、日本郵政代表取締役社長、スローライフ学会会長）

- ・ パネリスト：

荒井正吾（奈良県知事）

小山手修造（十津川村村長）

中村桂子（JT 生命誌研究館名誉館長、スローライフ学会副会長）

神野直彦（東京大学名誉教授、スローライフ学会学長）

坪井ゆづる（朝日新聞論説委員）

野口智子（ゆとり研究所、NPO スローライフ・ジャパン副理事長）



増田：

今日は会場にご当地の珍しいものを飾り付けていただきまして、地元の皆様にこのような形で設定していただき感謝申し上げます。このスローライフ・フォーラムは、2013年に奈良県では川上村で開催、その時も荒井知事さんにお出ましをいただいています。それ以来8年ぶりで奈良県での開催です。知事さん、そして村長さん以外は、基本的にはよそから見た十津川

村、奈良県の南部東部についてお話をするようになります。そういったやり取りの中で、こちらの地域の皆さんにも何か感じ取っていただければと思います。

最初に少し宣伝を。私、昨年から日本郵政の会社で働いておりますが、この十津川村にも7つの郵便局あり、大変皆様方にお世話になっておりますし、局長さん以下、社員の方々も地域を支えるという仕事をしていただいている。改めて皆さま方に感謝申し上げます。

私自身こちらへきて様々なこと、非常に多くの事を学ばせていただいております。十津川村にきたのは、2018年2月以来。今朝「果無集落」まで連れて行っていただき、雲海の中にちょうど峰々が見え、集落の生きざまというのを見させていただきました。

さて、パネリストのスローライフ・ジャパンの野口さんが、実はこちらの村の

谷瀬集落に大変深く入っただけです。なぜこれほどまでに十津川村、谷瀬にほれ込んで、何度も来ているのか、まずはその想いを語っていただければ。



野口：

これまで 30 カ所くらいのいろいろな規模の土地でこのフォーラムをやってきました。人口 3000 人ちょっとの村で、会場に並べた 100 いくつもの椅子がうまっていることが本当にうれしいです、ありがとうございます。

2012 年こちらの紀伊半島大水害の爪痕がまだひどいころから、奥大和、奈良県の南部東部に入ることになりました。これは県のご紹介でうかがうようになったのですが、そのなかで十津川村、谷瀬に通うことになりました。むらおこしの手助けです。谷瀬集落に入って最初に思ったことは、これは今までのやり方ではいけないな、というのが第一印象でした。私のような者が、皆さんの「寄合」にお邪魔しても、「よう来たな」という感じ。つまり自分たちに自信があって、よそから来た人を「いいよ、仲間に入れてあげるよ」と同じ立場で立っている感じでした。

しかし、なぜ谷瀬に通うようになったかです。どんどん人口が減り、このままでは死人は増えるが、子どもは増えない。切実なところに来ていた。それまでは集落に人が入ってくると村が荒れるので、吊り橋の奥には人を入れないという方針だったのですが「これからは何とか人を入れましょう」ということで話し合いが始まりました。ワークショップをやって、みんなでこれからどうしましょう、とアイデアを出しました。次に来るとそのまま、という所が多いのですが谷瀬は違いました。

「これをやろう、いつまでにやろう、誰がやろう」というところまで決めますと、一か月後に私が来るとできている。何も発言しないでいたおじいちゃんが、次に来た時にはベンチを作ってしまった。水のみ場を作ってしまった。それができる。都市部の同じ高齢の男性でしたら、水飲み場を作れますか？しかも丸太をくりぬいて、そこに沢の水を流し込んで。吊り橋の板を使ってベンチも。展望台を作るために木を伐って、というところまでやってしまう。言葉は少ないけれど、必ずやってしまう。この実行力に驚きました。

都市部でどんなに講釈をいっても、パソコンを使っても、この実行力はない。寡黙だけれど実現させる力、技があることに、私は「本当のむらおこしというのはこういうことなんだ」と思いました。だからあの橋も架けられたんだ。だから水害にも負けなかった。だから新十津川村も作れた。という何か魂を感じて、ここに来るのは私が学びに来ること、と思ったのです。いまや谷瀬の「ゆっくり散

歩道」に、多くの方が歩いてくださるようになり、移住者も増え、子どもの声も聞こえるようになりました。

増田：

続いて朝日新聞の現役で社説を書かれたり、全国をよく回っておられて、奈良県のご出身の坪井さん。「実は十津川村ははじめて」と伺いましたが、印象を含めて、十津川村で感じ取ったこと、あるいは全国の自治体を多く見ているなかでさらに気が付いたことなどを。



坪井：

奈良市に生まれまして、大台ヶ原には来ましたが十津川村は初めて来ました。今回参加するにあたって司馬遼太郎の本を読むとか、勉強してまいりましたが、来てやりたいということが三つありました。一つは「谷瀬の吊り橋」を渡る。もう一つは全国で初めて「源泉かけ流しを宣言」した温泉につかる。昨日それを果たしました。素晴らしい。三つめは「満天の星」を眺める。昨日、宿に露天風呂があったので、満天の星を仰ごうと、夜中一人で行ったのですが、曇っていて見えなかった。なので、また来る機会にそれを果たそうと次回に持ち越します。各地をそんなに真面目に回っているわけではなく、私に言わせると、十津川村は、この温泉と吊り橋と星。これでもう何もほしいものはないくらい、人々を引き付ける魅力がある所だなと実感した次第です。

自治をかじった経験からいうと、奈良県を私は評価しています。それは村がたくさん残っていることです。市町村合併で、全国にはもう村が一つもないという県がいくつもある。ここは全部で12ある。村という単位を大切にしている荒井知事の方針だったのであろうと思います。

こういったのはなぜかという、平成の市町村大合併で、合併したところとしなかったところ、というのが10年以上経ってどうなっているか。2年ほど前に日本弁護士会が調査をしたところ、合併したところ、しなかったところ、隣同士、人口、4000人くらいのところを比べると、合併したところの方が明らかに人口は減り、高齢化が進んでいるというデータが出たのです。それは要するに役場機能を失った、というのが大きかった。合併をしないでがんばっているということ、評価しているということを最初に申し上げておきます。

増田：

私、前回来た2月の時に夜中、星の数が多くて久しぶりに満天の星を見た覚えがあります。また次回是非ご覧いただければ。続きまして神野先生。神野先生は地方財政の大家でありますので、数多くの地域に足を運ばれて、多くの自治体の姿を見てきていらっしゃる方です。



神野：

大阪市立大学に勤務しておりました時に、「五新線」が幻になりました。100何億かけて、途中でやめると。その時に何回かお邪魔しました、というか、そのあとどうなるのだろうか。それ以来です、ご不幸な災害にあわれてからは初めてです。そうした意味では懐かしく思っています。

今日のご提案その他を見て、「村」を財政学的に定義すると、「生きている自然に働きかけて生活をしている」、村は「群れ」からですので、群れはつまり集合して集まっている地域のことを村と呼んでいる。そして「町」というのは、「死んでいる自然に働きかけて生活をする」、それと「人に働きかけて生活する」。第二次産業と第三次産業、と簡単にいってしまえばそういうことになります。それを町と呼んでいます。村と町の上に郡がある。したがって村というのは、自然に働きかけながら生活している人が、肌を寄せするようにして寄せ集まっている。それを村といいます。

もう少し村の構図を正式に言うと、村は働きかけるために住んでいる場所であって、働く場所のことは「野良」といいます。村、野良、山、この三つから構成されているのが村ですね。野良は野良仕事の野良ですので、働く場。その三層から成り立っている。山は里山であり、それから入相みみたいな役割を果たす場所も含めて山と呼んでいる。ただし「自然村」、私たち人間がそういう空間をつくってきたわけです。世界でも日本でも同じことです。この自然村の上に「行政村」行政の区画としての村をかさね書きしている。私はここを訪れた時に、その原型が残っていると思いました。

本日の「6つの提言」ここを見ていただくと、山で子育てしましょう、人のつながりを大事にしましょう。それから伝統と生きている自然を大事にしましょう。それから広いからいい、不便だからいい、とあります。これ重要なポイントで先ほど、基調講演のなかでもいっておられた。文明を拒否すると、文化が生まれる。

私は普段は山で生活をします。スウェーデンもそうやっている。スウェーデンではテレビを入れている家は失格です。あんなもの見るものではないので、テレ

びではなくて、自然に入ってその中で恵みに働きかけるという生活をして、普通の日に戻って、そのあとは山奥に入ってという生活をしている。それを見習って基本的には私は1200～1300メートルの山奥にいます。山はいろいろなものが豊かです。

私の豊かさの定義は何かというと、その人が欲しいもののうち、お金で買えるものが少ない人が豊かな人です。貧困のなかに二つあって、「所得貧困」と「人間貧困」。これはご存じの通り最近では社会的排除ということで、貧困を表すようになってきていますね。人間というのは人々の絆に護られている、いろいろな人がいつも助けにきてくれる、そういう状況がないことを人間貧困と呼んでいます。

今、世界的に異常な、根源的な危機に襲われていることは誰もが認識している。二つの破壊がおこなわれている。人間に必要な「自然環境」の破壊。もう一つ、人間に必要な「社会環境」の破壊です。環境というのは二つあるので、その象徴がSDGsですね。これは自己再生力の自然の再生力を破壊しないで、持続可能にすること。人間の社会、自己再生力があるので、これを破壊しないで持続可能にすること。この二つがSDGsのいっている持続可能の発展ということなので、それが実現されつつあるという風に感じております。

増田：

今、世界的にもコロナも影響しているのでしょうか、その前からいろいろな世界的な格差の問題、貧困の問題が指摘をされてきました。後半でお話になられたことはおそらくそれを、一方で正反対のことが、この十津川の地域でおこなわれている、営まれているということとの対比で、ご指摘をされたと理解をして



おります。自己再生力とか、今一番必要とされることにつながるものを、ここで感じられた、というお話だったのでは。

私も以前、岩手で知事をしておりました。いわゆる中山間と呼ばれる地域で営まれている生活、行政をどのように展開していけばいいのか、いつも自問自答し、悩みながら行っていました。奈良県では荒井知事さんが展開をしている「奈良モデル」というやり方があります。実は私もその様子を垣間見させていただき、そういう場に立ち合わせていただいたことがあります。知事さんと市町村長さんが定期的に、いろいろな情報交換をして、その信頼感の上に立ってそれぞれの行政分野について、ここまでやるのか、というくらいに県が市町村のサポートをしておいでです。

地元で県民の皆さん方がどのように感じ取っておられるかはわかりませんが、行政の分野では大変特筆すべきことです。そこまで県が市町村支援にまわっているというのは、ごくごく少数です。その意味で「奈良モデル」というのが、総務省の会合や資料にもでてきます。改めてではありますが、今日知事さんがおられるので、お聞かせいただければと思います。



荒井：

まずは皆さまが十津川に来ていただいて、うれしく光栄でございます。テーマが“「むら」に生きる”ということ。我々の立場からは、どのように村で生きようか、どのように十津川で生きようか、ということを考えよう、ということだと思います。考えるというのはフラットなことで、上から教えてやる、というのではなく。増田さんが「学びに来た」と、これはすごい言葉です。こちらも学ばしてください、これはフラットな関係ですね。

これは実は「奈良モデル」の原点です。国のいうことを聞け、知事のいうことを聞け、ということではなく「学びあおう」ということです。地域の課題がいろいろあるのを、悩み、希望を分かち合おうと、そのようなことをフラットに交流しようということ。今日は村の内と外との交流ですが、「教えてやるよ」という雰囲気では全然ないですよ。増田さんの言葉が象徴的で、「学びに来た」と。じゃあそこで、こちらが教えてやるよ、というようなことをいえる立場ではありませんので「私も学ばさせていただきます」という言葉でまずお返しして、学び合いたいと思います。

中村先生のお言葉が大変印象的でした。まず、森が大事だと。森はあふれるくらいにありますので、森が大事だといっていたのはありがたい。生物多様性というのもとても大事で、奈良県は「人と森の共生条例」というのを作りまし

た。生物多様性という目的を、四つの内の一つに入れました。今まで、森といったら林業で、とにかく生産をして早くいい杉を育てて儲けようとしてきました。そういう森だけを対象にしているのはダメだと否定したのです。だから今日の、森の生物多様性で“「むら」に生きる”を考えようというのが、まず第一に印象的でした。

二つ目は、時計の話。時計というのは生きるということと関係するように思います。時計に象徴される工業化。文明史だと狩猟、農業、牧畜、工業、デジタル化。中村先生のお話だと、デジタル化は工業化の延長ではなくて済むかもしれないと、ちょっと希望を持ちました。工業化では、効率化、省力化、思い通りになる、これは非個性ですよ。デジタル化のなかの個性というのは、どのようにするのか、ヒントをいただきました。

三つ目のことですが、利他心ですね。他人を知るということは、自分を知るとのこと。他人を知るというのが、新しい文化の原点かな、とインスピレーションがわきました。自分を知れば、他人に寛容になる、これを信じております。これからのデジタルになっても、多様な人が生きられるような村をつくるべきだ。

村のなかの多様性、村のなかでの生き方、それは子どもも年寄りも女性も、多様な村、寛容な村、生き生きと生きられるということですよと、おっしゃったような、メッセージとして受け取りました。

増田：

いつも十津川に来て思いますのは、昨日もよくよく聞くと、村から出て仕事をしてまた戻って、または他所から来て惚れ込んで居ついて、そうした多様な人たちと村民が上手く混じり合っていて暮らしている、暮らしを支えている印象が大変強い。村長さんいかがでしょう。



小山手：

十津川村は多様性の宝庫だと思っています。例えば食べ物一つとっても北の方では雑煮はみそ汁。一方南や特に西側では、すまし汁。同じ村で雑煮でさえも異なっている。また象徴的な言葉で、ある大字の人は役場の方へ行くことを「十津川へ行く」という。教育面でも、村外の北へ、南へそれぞれ向かう。そうありながらも全員が皆、十津川の典型であると思っている。いろんな地域にいろんな特色があるのですけれども、

皆さん全員が「十津川だ」という、その自負をなぜか持っている。それがここの強さだと思います。かくいう私も40年ぐらい経って戻ってきて、十津川の言葉を喋れないぐらいなのに、何か十津川の一つの典型じゃないかと自負している部分もあります。

「村」という言葉はややネガティブなイメージで、子どもの頃いわれたのは「もう少しで十津川村も町になれた。1万3000人位の人口の時に、もうひとがんばりで」と。北海道の新十津川町を「子どもの方が優秀で、あちらは町になった」と、町に対する引け目ですね。ですが、先ほどから村が残っているということ誇りにしようとか、多様性の強さとか、非常にポジティブな形で村を考えるというご指摘いただき、私もいままで『広辞苑』的な形での考えだったと密かに反省しています。

増田：

私、以前、北海道の顧問をやっていたので、新十津川町にもお伺いしたことがあります。明治のあのときに移った皆様方も、やっぱりこちらに対する想いは大変強いんですね。繋がっているんだと思いました。多様で55の集落それぞれの食べ物や踊り方も違う文化なのに、前の更谷村長さんから「水害のときには本当によくまとまって、その後の復旧で、一致団結してやれた」と聞きます。なぜまとまるのか。

小山手：

答えがなかなか見つからないのですが、私はやはり税だと思います。十津川村は太閤検地のときからずっと御赦免所でした。もちろんそれは朝廷に対する忠勤ともいわれていますが、実際には税より徴税費用の方が多分高かったためかもと。結果として近隣の地区との姻戚関係なども非常に薄く、十津川で関係が完結するケースも多いです。一歩超えると課税、こちらは非課税というところが背景にあったのではないかと思います。

増田：

歴史も踏まえ、十津川が生きていく上でいろんな工夫をしながら、強さを保っているということですね。県として南部地域に対しての思いが強くあり、市町村



合併という形で基礎自治体の力を強めるのではなくて、基礎自治体をそれぞれの行政単位を活かしながら、県がサポート支援をするという「奈良モデル」を展開していらっしゃる。村が数多く残っているということに繋がるんですが、どう政策をとられたのでしょうか？

荒井：

市町村の合併というのは、明治の始めに71,000あった村が、1,700になった。それで日本が良くなったか、地方が良くなったかというのが大きな問いです。地方の小さな村でも多様な地方がまと



まると、まとまりがなくて漂流してしまうのではないかと。増田さんがおっしゃった多様性はどのようにまとめるのかという問いはすごく大事だと思います。強制や同調しなさいという明治政府の教え込みは駄目だと思う。多様ななかでどうまとめるかは政治的なテクニックで我々の課題です。

「奈良モデル」はフラットで議論しましょう、何よりも対話議論が大事、知事と市町村長は同じ立場ですよ、と。そのときに話がまとまっていくのは、地域課題の共有化です。目標の共通化、課題の共通認識というのが絶対必要です。それが共通であればいろいろできます。「お金を一緒に使おうよ」「そのためには何をすべきか考えようよ」と。そのような気持ちのところには、中村先生のおっしゃった「利他」が集まってくる。お金のある人はお金をくれればいい、お金のない人は知恵をくれればいい、金も知恵もない人は体を動かしてくれればいい、あるいは励ましてくれるだけでもいい。

十津川は、十の水辺と谷という意味。私から見ると十津川の政治はなかなかまとまらない。選挙になると「向こうの澤や谷はこうだから、俺は反対だ」という人が多い」といつも村長さんの愚痴を聞いてきました。まとまらないのをまとめるのがチャレンジで、リスペクトしながらできると思います。上から抑えるパター

ンではなく、腹のなかをさらけ出して話し合うのが大事。例えば健康ならもっと健康になることを考えて、病院を一緒に作ろうとすれば実現できたわけですから。遅れているではなく素地があると考えて、奈良県南部は日本で一番健康になろう！と。目標の共有化から始まるのではないかと思っています。

増田：

坪井さん、先ほど平成の大合併を言いかけておられましたが。

坪井：

私は取材する側で見ていて、何のために合併するのが疑問でした。国にもお金がない、県にもない。行政にお金が回らない時代になって、もっと効率化していかないと行政が持たないと考えた人が国にいて、そうすると反対の声が大きいと進められ



れないので、少なくするには首長の数を減らせばいいと。半分悪意で見るとですが・・・。善意で考えると、国はこの国を続けていくために、お金がない時代にはお金がないなりの行政をしなくちゃいけない。そのためには、まとまってくださいねっていうことですね。

コンパクトにされる側からすると、役場の機能が失われただけで、地域の経済はどれだけ疲弊したか。すると若者はそこで稼げないと外に出てゆき高齢化が進む悪循環。合併で良い事があったか？全然無かったとはいわないけれど、過疎化はずっと続いています。昭和40年から過疎法を作って過疎の町を何とかしなくちゃいけないとお金を入れてきて、十津川の場合は橋ができて良かったですが、ただ過疎が止まらないのはなぜか。

皆さんはご記憶ないかもしれませんが、安倍総理大臣が「地方創生」と言ったとき、「東京の一極集中を5年で止める。東京への流入超過を5年たったら、出ていく人と入ってくる人の数を揃えます」って旗を振ったのですが、結局東京一極集中というのは止まらない。コロナで東京で働かなくてもいいってこと

がわかって、若干東京から出る人が前より増えましたが、この日本の国は一極集中が止まっていない。効率、効率といってくると、十津川のようにどんなに素晴らしい自然があっても、都市部から遠いことがハンディに感じてしまう。

地方創生でもう一つ言えるのは、「まち・ひと・しごと」の好循環をしていきましょうということだったのですが、どうもやっていることは、仕事を作れ、仕事を作れ、稼げ、稼げと国はいつて。要するに稼げない地域は駄目な地域だといつて切り捨てていくみたいな風潮が止まってないと私は思っています。ですから今回十津川に来させていただいて、さっき村長さんが困るぐらいバラバラな、確かに55も字があったらきっとどうやってまとめるのかは私も理解できませんけども、そういう多様性のあるところっていうのは、逆に今後の生きのこることの芽があるんだろうと思っています。

一つ私が好きな村長さんが長野県にいまして、その村長さんがいつていたのは、「仕事をどう作るかってのは、実は地域にはあるんだ。10人いたら10人が一緒に働けるんじゃないくて、10人いたら10人がそれぞれの仕事で働ける、生きていけるぐらいにするんだ。それが村作りだ」と。十津川はきっとそれを実践できる所だなと思いました。

増田：

今おっしゃった、稼げない地域の切り捨てについては、最近あちこちで「稼ぐ力」といわれるようになっていきます。経産省などのレポートを読むと、まさに企業は合理化して生産性を向上させろと。確かに稼ぐこと自体をストレートに聞かれると、否定するものではありませんが、私はそれ以前にやっぱり「生きる力」がしっかりと備わっていることが、稼ぐことに対しての知恵もいっぱい引き出してくると思う。神野先生は、スウェーデンで暮らされて、特に基礎自治体としてご覧になった場合、この十津川と共通点や違いをどんな風にご覧になりますか？

神野：

ある意味で共通していると思います。彼らの誇りは森の民。日本人は日当たりの良い所を好みますが、彼らは日当たりの悪いところも楽しんでる。単に森と

ともに生きている。日本人に森を散歩しましょうと誘っても、ただ単にウロウロすることを楽しむのが解らないといわれます。

それからもう一つは、人間が生まれて育って死んでいく包括的な機能がまとまっているところが村。世界的に村は生きるための単位。そこで生きるための何かができなければ、逃げ出る人が多くなる。先ほどの合併の話でいうとスウェーデンも合併しました。自分たちだけではできないことが起きた時のメリットと、荒井知事のおっしゃった課題の共通認識で、合併した方が良いと判断して合併する場合があります。その場合、合併したとしても、それぞれの生活に必要なサービスはそれぞれの地域ごとに違うので、地区委員会を認めて、対人社会サービスはその地区ごとに出して生活様式に合わせます。地域自治組織で合併したとしてもやれるってことです。

増田：

神野先生が以前、別のところでおっしゃった事がすごく頭に残っています。対人サービスや社会福祉の様に生きざまとか価値観が問われるようなものは、合併で合わせてしまうと、大が小を飲み込んでしまう。全て東京と同じように、が勝つに決まっている。やっぱりそこに十津川の考え方や価値観を残しつつ、しかし一方で、合理化すべきところもあるとすればそこを合理化するっていうことが大事かと思います。

野口さんより順番に、十津川に対する思いや分科会での提言などを受けて更に提言など、一言ずつお願い致します。

野口：

生きるということを、このコロナの間に全国の人が考えてきました。生きることをちゃんと生きる、強く生きるのができるのはこういう地方の方々だと思います。分科会でこんな発言もありました。「お弁当に箸を忘れたときは箸を作ればいい」東京だと私達はもう食べられないです。無い物は作ればいいっていう話があり、強いなあと思いました。4～5歳で1000メートル級の山に平気で登る。親以外の大人たちと、地下足袋で登っちゃう、そういう山っ子がいる十津川村も強いですね。



そういう強さをおすそ分けしてもらおう観光が、これからのこの土地の観光だと思えます。オンラインで分科会に参加した都市部の方が、「十津川は自分を修行させてくれるところだ」とおっしゃいました。村民の方がそういう場なんだ、自分たちは強いんだぞっていうのをいつも意識していることがまず大事です。元気で強いというだけじゃなくて、例えば今日飾ってある「ムコダマシ」を大事にしてそれを食べ続けることや、干し芋などの文化を丁寧はずっと伝承していくこと、こういうのも強さなんですね。

十津川村は55の字がある。その一つずつが固有の文化、生活を大事にすると強くなります。それが集まって十津川郷という一つの緩いくくりになる。例えてみれば、ブドウの状態だと思えます。1粒1粒が味わい深く、すごくきちんと熟れた良いブドウの粒々が、房という形で繋がっているのが十津川郷です。大きいのが12の村々。天川村のゴロゴロ水、会場玄関に飾ってあった野迫川村の槇、会場に展示されている12村のポスターはどれも素晴らしいです。12の村々の個性、これも1粒1粒のブドウなんですね。村々が個性を大事に強く生きていく、それが南部東部、つまり奥大和という一つのくくりになって胸を張っていく。これは日本の将来をここから開拓できると私は思っています。東京は、外は立派で硬いけれど、なかはグズグズのスイカです。コロナで叩かれればすぐ潰れる。そうしたときに、粒粒がしっかりしてるブドウは強いと思えます。

今回の分科会に30～80代の方がご参加で、聞くと本当にご立派な考えをお持ちでした。せっかく集まっているいろんな発言をされたので、ぜひこの十津川村でスローライフ・プロジェクトを何か始めたいものです。みんなが提案して出したことを実現していきましょう。奥大和全体でも、今日をきっかけに。

坪井：

冒頭に吊り橋と温泉と星を楽しみにしてきたと申し上げましたが、実は昨日来て、もう一つすごいと思ったのはお酒です。谷瀬の日本酒も、ヤツガシラの焼酎も美味しかった。鹿児島県鹿屋市の「やねだん」は集落で焼酎を作って大売れました。地方創生大臣が見学に行ったりするぐらい有名になりました。その合言葉は「補助金に代わるものは何か、汗だ！」って、いい言葉だなと思います。私は十津川の皆さんも補助金に代わる汗を、たくさんかける方々だろうと期待しています。一点だけ追加すると、NPOの活動は全国で広がっていますが、ともすると行政の下請けになってしまう。そうならないように行政を逆にこき使うようなNPO活動をしてほしい。特にこういう地域だと、交通網、NPOが高齢者を運ぶのを法律的にできるようになってきているので、その辺も頑張っていたきたいと思います。

神野：

今コロナに襲われて都会はとんでもない現象が起きています。赤ちゃんはもう笑わなくなりました。マスクをしたままの顔しか見たことないので、それから子どもたちが人間の感覚がわからなくなっています。このままいけば、私達は人間が社会を形成して、手を繋ぎ合って生きていくのだっていう意欲も能力もなくなる。子どもたちが育てられなくなるのではないかという、危機意識が非常に強いんです。



十津川は最先端に立たなくてははいけない。つまり、今までは何かゴールはこっちだと思っていたのが、今逆方向にも展開しつつあって、世界的にも田園化、逆都市化と逆転現象が起こりつつある時期ですので、十津川の人たちは十津川のためだけではなく、人間の歴史のために、これが人間の社会のあり方なのだというモデルを示していただけないかと思います。

皆さんもご存知の通り、人間にどうしてこんな「禍」が増えたのかというと、ギリシャ神話の『パンドラの箱』で、パンドラが災いの詰まっている箱を開けて、ワーッと出てきて不幸な状態に今なっている。忘れてはならないことは、パンドラが慌てて蓋を閉めたときに一つだけ小さいものが残ったんです。それは希望です。まだ残っている希望の芽を持っている十津川なので、その希望を大きく膨らませていただきたいと思います。

中村：

具体的に二つだけ申し上げたいと思います。私、これからの社会は世界中で必要なものだけ作る社会にしたいなと思っています。要らないものは作らない。テレビドラマ『北の国から』で田中邦衛さんが演じた黒板五郎のセリフに私の好きな言葉があるんです。「必要だと思うものは何でも自分で作りゃいいんだよ。途中で面倒くさくなったらそれはいらぬものなんだよ」って、名言だと思います。多分ここの方たちが橋を作り、それから散歩道を作り、これは本当に要るものだったから、野口さんがびっくりするような実行力でお作りになったのだと思います。ここの方たちは多分本当にいるものをかなりご存知なのじゃないか。それをどんどんやってくださることが、これからの社会の一つのモデルになりそう



な気がして、期待しています。

二番目は森のことです。ここは96%が森で、放つといたら100%になりそうだと村長さんがおっし

やっていました。森と広い村と 55 の字と多様。なぜ多様なのかとおっしゃっていましたが、多分、人間より森の方が先にあったわけです。自然というのは、必ず多様なのです。森って一見一様だけど、実は森へ入ってきた人間との付き合い方で、そのときそのときで変わるから多様な文化がある。そこをこれから人類全体で森林との付き合い方を、熱帯林を壊さないなんていうのも含めて考えたい。とっても大事なことです。この村は今まで長い間、森林との付き合いを見事にやってきたことと、なぜ多様なのかを突き詰めて考えると、そこからすごい答えが出てくるのではないかと思います。

小山手：

森の問題。私はどうしても現状は、バランスを欠いていると思っています。森との付き合い方を、もう一度見直すタイミングが来ていると思います。

また、日頃からもっと村民にこの十津川に自信を持っていた

だきたいと思っています。今回パネラーの皆様方から十津川村の潜在力に評価や希望の尺度を提供していただいた。特に多様性を包含するのが十津川村の特徴で、広ければ広いほど課題も大きい。ただ、課題が大きければそれを克服したときの果実もやっぱり大きいと思っています。

今回いただいた提言を聞いて、村外の方々のコメントはその背景にもものすごい危機感がうかがえました。残されてる時間はそれほどないのではないかと。時計を外す、とは全く反対の発言になってしまいますが、もう少しスピードアップがどうしても、今、必要ではないかと。今回は本当に心強く感じました。

荒井：

今日は多くのことを学ばせていただきましたが、増田さんが地域の価値観という言葉を使い「地域のアイデンティティ、十津川のアイデンティティを大事に





しろ」というお言葉だったと思います。私は「十津川精神」「十津川魂」は十分力強いものがあると思います。

その例として、いつも思い出すのは明治 20 年頃の大水害で人口の半分ぐらいが北海道に移住したときのこと。それが秋で、冬が越せるか心配になった初代知事の税所篤という立派な方が金一封を与えました。ところが、十津川村から北海道に行った人達はそのお金を使わなかった。自分で持っていたもので原野で冬を越して、そのお金を何に使ったかといいますと翌年小学校を作った。子どものための教育に使ったのです。これは十津川魂の誇るべき点だといつも思っています。

そのような魂がまだおありになるとと思いますが、魂だけでは食っていけない。生きる力は、稼ぐ力に直結しなきゃいけないし、我々知恵を出さなくてはと思います。稼ぐというのは働く場ということになりますので、森で働くか、森を利用して働くか。私はすぐにはいい知恵がないのですが、一つは、五條の方に緊急防災基地という名目で 2000 メートルの滑走路を作ることが、国の補助で認められてできます。十津川から車ならまっすぐ行くと 20 分ぐらい。防災の目的が主ですが、平時の空港をどう活用するか。その一つのアイディアで、森の恵みを世



界中に届けること。例えばオランダのチューリップはデジタルの注文で世界中に届く。森の恵みは何か、キノコやニホンミツバチの蜂蜜など、生産量は少ないけれども森の恵みは凄いよと、五條の空港からどこへでも届けるのも一つのアイデアかと思います。十津川のものだけ届けなくても、いいわけで。空港ビジネスというのがあって2000メートルってすごい力ですので、それも一つの稼ぐ力になるのではと思います。



増田：

どうもありがとうございました。それぞれのパネリストの皆さんからいろいろなご発言が出ました。私も最後に一つだけ。分科会の提言が6つ、どれもその通りで、今後実行されていけばいずれも素晴らしい

ことに繋がると思います。そういった提言をまとめる過程の議事録も拝見していましたら、地域の方が勉強のために島根県の隠岐海士町へ行ったと。大変有名なところで、前の村長さんが「地元にはないものはないんだ、だけどもあるものを生かしていく」ということです。町の魅力に惹きつけられる人がすごく多いところ。そこをご覧になった方がこんなことをおっしゃっています。「海士町に行って一番感じたのは、その町の魅力を村民の誰もが魅力を伝えられる。そのチーム力が凄かった」と。ですから私、十津川でも同じ言葉じゃなくてもいい、地元の良さ、地元に対しての愛のようなもので、皆さんがそれぞれの言葉で、村外の人に向かって伝えられるようなそういう地域であってほしいと思いました。

もう一つ、昨日お会いしましたフランスからこちらに来られた方がおっしゃっていたようですが、「自然は素晴らしいんだけど何かと結ぶ、健康と自然を結びつけるような…」と。私もある先輩に岩手で“健康院”みたいなのを作れないかと言われたことがあります。病院は地域の医療を守るためにいろいろご苦労しておいでですけども、病院は病を治すところでマイナスを元に戻すところ。

健康院はゼロをプラスにするような、そこへ行くともものすごく心身がリフレッシュして健康になるところ。村民の人たちはいつもそう暮らしているのでプラスもマイナスもないでしょうけども、私どものような村外の間人が十津川に行って、もっともっと元気になりたいとか、心身ともにリフレッシュしたいときに、温かく迎え入れてくれるような場所が日本の何処かにできないかなと。私はまさに十津川はその可能性をいっぱい持っていますし、分科会でもそういう発言がありました。やっぱりそういうところを感じ取っていらっしゃるのだと思いました。

つたないコーディネートでどう皆さんに響いたのかと思いますが、各パネリストの皆さんから大変含蓄のある言葉がいろいろ聞かれたのではないかと考えております。どうもありがとうございました。

